

おお大勝利

平成 27 年度山東サッカー一部報第 11 号 (9 月 8 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

Y1 怒濤の3連敗 光明は？

部報作成滞り、大変失礼いたしました。公務多忙および怠慢により、リーグ戦 3 節まとめの報告となります。**タイトルにありますように、結論から申しまして 3 連敗です。**その前の日大山形、東海大山形との対戦でも負けているので、これで**後期 5 連敗** (全敗) です。暗くもなりますが、結果が簡単に出ないのは予想の範囲内。諦めていた、と言うとネガティブですが、この場合、自分たちの立ち位置をわきまえていたと言いたところ。結果を重視しないということではありませんが、試合にスコア上負けたとしても、**現在の自分たちの課題から考えてパフォーマンスに向上がみられた、という結果もまた、重要な**のです。もちろん最終的には勝利という結果を残す必要があると思いますが、**結果とはそればかりではない、**とは言いたところ (決して負けこんでいるから、そう言う訳ではなく)。ともかく、**3 連敗だから、負け続けているから、部報作成が滞っていたわけではない、**ということは強く言わせて下さい！

さて、まず 8 月 22 日 (土) 第 10 節羽黒戦。場所は米沢 SF、人工芝。この日、第一試合 10:00、第二試合 12:00、第三試合 14:00、第四試合 16:00 という 4 試合が同会場で続く。山東対羽黒、年度当初は第三試合でしたが、予定が変わり第二試合に変更となっていた。羽黒はそれを把握していなかったようで、試合開始時間が過ぎても、羽黒は現れない。融通利かせずに判断すれば、その時点で山東の不戦勝 (スコア 10 対 0 で勝ち点 3 ゲット)。ただし、**これは育成年代の試合であり、「大人の都合」で動かしてよいこととそうじゃないことがある(はず)。**当該チームとして「30 分待ちますが、それを過ぎたら不戦勝でお願いします」とリーグ責任者の日大山形監督に伝えていましたが、果せるかな、羽黒は 12、3 分遅れでバス到着。バスを降りると選手はすでにユニフォームに着替えシューズを履いており、そのままダッシュで試合開始の整列へ。まあ、規定が明確にあるわけでもないし、育成年代の試合ですしね～ (でも、選手権や県総体だったら失格ですね)。今回は大目に見ました。試合前選手に「本来 10 対 0 で山東の勝利。そこを試合するんだから、11 点取られなければ山東の勝ちだ。」と冗談で伝えると、「え、ホントですか？」といううれしい反応とともに、「11 点以上 (10 点以上) 取られたら、ヤバイですね」という正直な反応がうかがえる。**要は、山東の選手、「二桁失点はありません」ときっぱり言い切る自信がない。**何なんだそれは、と非難したいところですが、**何を隠そう私も自信がない！！** まあ、自虐タイムはそのくらいにして、**羽黒の選手はアツクなしだし、IH 出場の羽黒、山東相手に気合が入っていないだろうし、チャンスだとは思っていました。**

試合が開始されると、やはり明らかに羽黒の選手の足が重い。気合が入っていない。山東の試合の入りはまずまず・・・と思っていると、前半 3 分、相手の平凡なセンターリングのミスがいきなりゴールする**シュータリング**¹を喰らい、失点。山東も羽黒も、「これで入っちゃうの？」

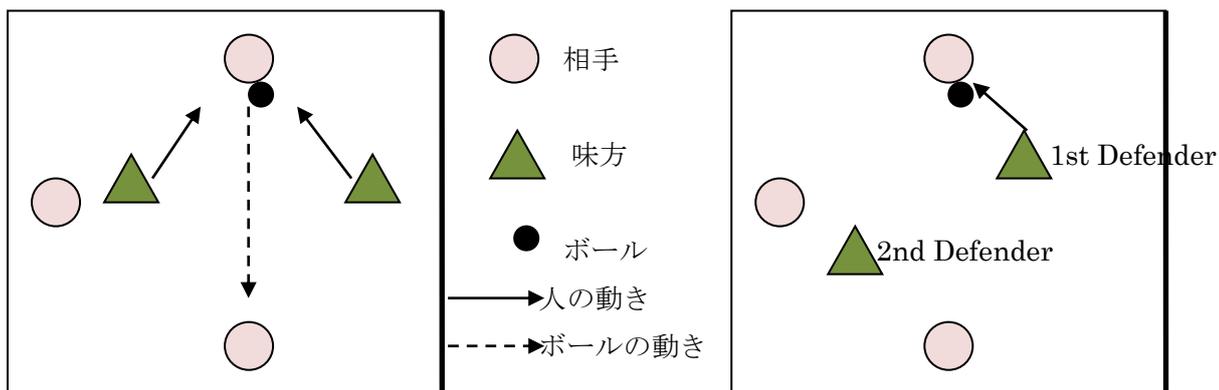
¹ センターリングがゴールに直接入ってしまう (入りそうになること)。シュート+センターリングの造語。

と唾然とした、という表現がぴったり。ただし、山東の選手たち、そこで意気消沈するどころか、一気に攻め立て、**苗場後に FW として定着したカズマがファインシュートを決め**、前半 5 分に同点にする。山東にあれだけ攻められてしまうあたり、チャンピオンチーム、やはり気合が入っていない。その後、しばらく羽黒の猛攻を耐えますが、前半 20 分、何でもない CK からのシュート、というか当たり損ねのふんわりしたボールを、DF と GK でお見合いして、失点。あのですね、ズバッと決められでもしたら逆に気持ちがいいのですが、訳のわからない失点はホント応える。一生懸命攻めて得点したのは何だったんだ、という虚しさを覚える。ただし、(私を知っている方には意外に感じられるかもしれませんが)ベンチでは比較的冷静でした。だって、GK クロサカには悪いですが、練習や練習試合を通して、そういうことも想定済みですから。あまり強い言葉で迫る気持ちにはなれない。前半のうちにもう一点、右サイドをきれいにぶち抜かれ、センターリングをそのまま押し込まれ、失点し、結局 1 対 3 で折り返す。この失点、センターリングにクロサカは果敢に反応し、結果届きませんでした、**積極的にフレーしての失点なので、まだ未来がある**。どうせ失点するなら、こういう形でなければならない (1 失点目や 2 失点目のような失点パターンは FP が可哀そうだ)。後半は途中で **GK なりたての河北中出身一年ハレル** を起用²し、自他共にまだまだのレベルであることを痛感するのですが、すべては勉強！ 後半、一失点した後、**途中出場のユータローさんが得意のカットインからギリギリのコースに蹴りこみ、もう一点追加**。その後、なんだかんだやられ、結局 2 対 6。うちが良かったというより、羽黒の問題で山東が結構攻める時間もあり、負けはしましたが、山東にとって面白みのある試合ではありました。

翌週、8 月 29 日 (土) 山東は学校祭当日でしたが、抜け出して天童第二 (人工芝) にて第 11 節山形中央戦。もちろん言わずと知れた強豪。山形中央の指揮を取るのは、監督代行の「大ノリオ」先生。山東サッカー部 OB の「生ける伝説」です。弱小山東相手に緩むかと思いきや、しっかりベストメンバーで臨んで来る。**試合内容は割愛。つながれまくり、攻められまくり、何もさせてもらえず**。結局 0 対 5 の敗戦。シュートを 30 本弱打たれたが、うちのシュートは片手で測れる程度。**誰が 1st Defender か曖昧なまま相手ボールホルダーに食いつくので、簡単にギャップ (間³) にボールを出されて続けている (図 1 参照)。これでは勝負にならない。**

【図 1】

【図 2】



² 山東一年生に GK がいなかったため、選手の話し合い・顧問の勧めにより、FP か GK へと転向。センターリングに果敢に飛び出すハイボールの処理は、現時点でもなかなかのものです。1 対 1 の対応はまだですが、ペナルティエリア外へと出てルーズボール等をクリアするブレイクアウェイもなかなか良い (前は FP として CB だったのだから、それくらいできて当然ともいえるが)。シュートストップ (やキャッチングの基礎) はまだまだ完全な素人で、やはり 2 年クロサカに一日の長があります。クロサカは (入部当初マツキの放言によりフィジカルモンスター=フィジモンとの異名を取ったものの) フィジカルはないですが、シュートを止める感覚は悪くない。入部当初はそれも怪しかったので、齋藤 GK コーチの指導の賜物ですね。

³ 昔は「間」と呼んでいました。

最初にアフロ一し限定する 1st Defender (challenge) が決まってはじめて 2nd Defender (cover) の適切なポジショニングが決まるのです⁴。この二人の連携が適切だと、ボールを奪いに行きつつ、パスコースを限定できる (図 2 参照)。これは、4 対 2 というよくなされるボールポゼッションの練習でも身につく基礎の基礎。**山東の選手、私の指導不足以外の何ものでもないですが、こういう基本中の基本を 11 対 11 のピッチで遂行できない (4 対 2 の練習をやらせればできるのに)**。コミュニケーションの問題もあるだろうし、「あいつにボールが渡ったらおれがすぐチャレンジだな」とか「相手 SB が追い越してきたらマークをスライドしなきゃな」などと、そもそも予測し判断していないということ。**山東の選手が「こうなったらこう」「あんなったらこう」と常に頭をフル回転させ場合分けし、連携し合わなかったら、技術・体力で劣るんだから、勝てっこない**⁵。その予測・判断ができていたら、選手は自ずと自分のイメージを味方に伝えあうはず (だってイメージ通りじゃないプレーは選手にとり苦痛だから)。**コミュニケーションをはかっていない、とは予測・判断が不足しているということなんです**ね (そして、それを身につけるためのトレーニングが不足しているということなんです) ⁶。これ、こう書くと、身につけるのはとてつもなく遠い作業のように思われますが、**山東の選手は 4 対 2 等で原理原則は理解しているので、11 対 11 での応用はいわゆる坐学でも一定レベルまでは到達できます**⁷。ギャップを通されまくり、FW (1st Defender) と MF (2nd Defender) の連動を欠いて、バラバラに対応したつけを払わされた山形中央戦は、羽黒戦では蔽い隠された山東の課題を浮き彫りにさせてくれました。あ、あと、山形中央戦では、**曖昧に喰いついてはワンツーで剥がされるシーンが多く、山東の選手がワンツーに付いていけない**という課題も改めて明確になりました。まとめると、①1st Defender を素早く決定する、②前線から嵌めに行くときは FW と MF は連動する (嵌められない時は戻る)、③ボールを簡単に奪いに行けない時には限定しつつワンツーに付いていく、以上の課題が明確になりました⁸。

9 月 6 日 (日) 第 12 節米沢中央戦が白鷹町東陽の里 G で行われました。一言で言って、守備の連動について共通理解をはかり、試合に臨ませました。試合開始は 13:00 で、開始時点では雨がぽつぽつ降っていたという程度だったでしょうか。好天に恵まれていたのでテントを

⁴ もちろん、第一守備者、第二守備者だけでなく、それ以外の選手も、彼らによってなされる限定に連動してポジショニングを決めるのです。たとえば、図 2 を前提にすれば、ボールホルダーに対して第一守備者 1st Defender が右から限定しているので、図 2 の右下方向 (ボールと第一守備者とを結ぶ延長線上) にボールがすぐ来ることはない判断できる。よって、第三守備者はその方向に相手がいってもそれを無視し、縦パスを要求している相手の方向に寄ることができる。このように、**第一守備者を見て第二守備者が配置につきそれを見て第三が・・・と決まっていく、すなわち連動していくので、第一守備者が限定を守らず曖昧にすると、グループによる守備の戦術すべてが狂っていくことになります**。

⁵ ちなみに、この守備における頭の回転は、攻撃においても当然生かされます。「いま突然足元にボールがあったら最善のプレーは何か」「いまどこにボールを運んだら (誰にパスしたら) 一番いいか」のシミュレーションをし続けていると、ボールが来てから焦ることはありません。**よく守備で ball watcher にならずに相手選手やスペース等周囲を見渡す必要性が言われますが、周囲を見渡し前もって判断しておくことの重要性は、攻撃においても全く同様に当てはまります**。ボールをもらう時に no plan の選手は、ボールばかり凝視する ball watcher になっており、判断できていないのです。

⁶ この認識は、よく「声を出さない」「元気がない」など抽象論で語られることの多い反省も原因を取り違えている可能性がある、ということを示すでしょう。

⁷ たとえば「ヒロとタイセーはあのときはこうマークしたけど、あーだったんじゃないか」などの戦術的な会話をシミュレーションを行い、次に備えさせるだけで、一定レベルまで問題解決できます。

⁸ それにしても、山形中央はレベルのかなり落ちる相手に全然緩まず、しっかり 90 分戦っていたと思います (この試合の山東のシュート 2 本⇒しかも GK がヒヤッとさせるシュートでは全くない)。次戦の相手が日大山形であり、「この相手 (山東) にギリギリ通用するレベルのプレーでは仕方がない。圧倒し続けなくては。」という意識の高さを感じました。

作っていなかったのですが、徐々に雨脚が強くなる。そんなコンディションで試合はスタート。試合が始まると、アバウトな応酬ながら山東も悪くはない。もちろん、**米中はきちんとつないでくるが、山東の前線も頑張って前線からの守備に入っているし、ボランチも今回はきちんとFWと連動しているので、これまでの米中との対戦のように「余裕でつながせている」訳ではない**。また、雨脚が強くなり、スリッピーなピッチ状況になってきたので、米中の選手のコントロールが乱れるシーンが多くなってきたという事情もあり、試合が混沌としている。山東は相変わらずアバウトな攻撃だが、**裏のスペースへのルーサーボールをFWが一生懸命確保し、最悪でもCKにつなげるシーンが多く、そこそこやっている**。そんなどっちつかずの展開の中、山東の右サイドを破られ挟まれてマイナスのボールを供給され、そこを合わせられて失点。**右SBヒロ**はスライディングを多用する魂あふれるプレーでポジションを確保しつつありますが、この場面では対応が軽かった。対応遅れながらも果敢にボールを奪いに行った姿勢は評価できるものの、遅れていたら行くふりして行かずに相手にボールをはたかせてその次を狙う慎重な対応が望まれた。もし奪いに行くなら行き切るのでもよかったかも（でもその場合ファールになりカードをもらうことになる可能性が高い）。ともかく、成長を期待しているので、あえて厳しく記述。また、中の対応はどうだったか。マイナスのボールに対応するとしたらボランチになるが、ボランチの戻りはどうだったか。前半10分ほどで0対1。もう少しスコアレスで粘りたかった、というのが本音ではある。その後もショートカウンターからそここの場面を作り出している。あっ、途中で「鋼の股間」CBワタコーが負傷退場し、**今年サッカー部に復帰したハヤト（2年）**がボランチからCBにスライド。ハヤトとシュンのCBコンビ、それから一試合通じて及第点だったと思います⁹。前半4分6分だとすれば、後半は5分5分だったような。オフサイドやラインを割ったとの判定に助けられ失点しなかったもののネットを揺らされ危なかったシーンもあるが、一点の欲しい山東が時間を追うごとに押し寄せになり、米中に0対1のままの試合終了を意識させもしました。結局、0対1で敗戦。惜しかったとの思いはありますが、いろんな偶然が重なってのスコアなのでね。「ああなってタラ」とか「こーしてレバ」などのタラレバを言いたくもなりますが、それは相手も同じ。山東が米中のネットを揺らすことができなかつた（後は決めるだけ、というビッグチャンスは実質なかつた¹⁰）というのが現実。ただ、**（後藤報道局長からこう褒められたように）最近なかつた手に汗握る接戦を演じることができたし、その原因としてのコレクティブな守備の形が見えてきたということ（コレクティブな守備へと改善できたということ）は自信にしているのではと思います**。悔しい敗戦となりましたが、地区新人に向けて良い経験を積ませてもらったとも言えます。また、改めて自分たちの立ち位置、すなわち**《主導権を握られつつも組織的守備で粘り、少ないチャンスをものにして行くしびといチーム》**を持ち味にして行かなければならないことが再確認できました。

さて、今週末いよいよ地区新人です。山東は、様々な偶然により、初戦強豪山商との対戦です（そこで負けると二日目なく終了＝県大会出られず）。山商は皆さんご存じの通り、メンバーのほとんどが県トレセン（県選抜）。超豪華なメンバーを擁する。地区新人初戦は、**ステーキ井（山商）が勝つか卵かけご飯（山東）が勝つか**、という勝負です。応援よろしくお願ひします。**9月12日（土）地区新人 山形商業戦 @落合南 11:00～ ⇒ 勝つと 15:40～**

⁹ 本人たちには言いましたが、後半の最後の方は、「守備では最悪のことを考えて対応する」という原則通りに動けず、しっかりいったん戻ってから前向きにボールに対応することや、味方が競り負けることを前提に戻って対応する、ということができないシーンが複数回ありました。

¹⁰ 強いて挙げれば、後半最後にカズマがゴールに近づき放ったシュートが惜しかったとは言えます。